

表8 1件当たり日数、1件当たり金額 (62年6月診療)

診療区分 疾病名	1件当たり日数		1件当たり金額	
	入院	外来	入院	外来
感染症及び寄生虫症	9.0	1.7	192,630	7,357
新生物	21.5	2.0	508,339	25,847
内分泌栄養及び代謝疾患	20.4	1.9	482,137	10,700
血液及び造血管の疾患	3.0	1.8	4,110	5,726
精神障害	22.8	1.9	211,264	8,146
神経系及び感覚器の疾患	15.0	1.9	224,482	6,395
循環器系の疾患	23.6	2.0	362,825	10,369
呼吸器系の疾患	6.4	2.0	134,850	7,326
消化器系の疾患	13.8	2.0	253,947	12,016
泌尿生殖器系の疾患	10.8	2.2	190,902	15,173
妊娠・分娩及び産じよくの合併症	8.1	2.0	115,501	8,594
皮膚及び皮下組織の疾患	5.0	1.7	193,230	5,215
筋骨格系及び結合組織の疾患	20.9	2.8	311,845	8,062
先天異常	-	1.5	-	10,537
周産期に発生した主要病態	-	-	-	-
症状徴候及び診断名不明確の状態	22.0	1.3	342,800	5,581
損傷及び中毒	15.1	2.5	144,378	7,532
計	14.4	2.0	257,641	9,216
全国教職員平均値	13.2	2.2	238,355	10,204

女性は、妊娠・分娩及び産じよくの合併症とそれぞれ特有の疾患が大きな割合を占めています。

(3) 年代別の受診状況

受診率の高い疾病を、年代別にみたのが表7です。呼吸器系の疾患は、男女とも三十代をピークに下がる傾向にあり、循環器系の疾患、消化器系の疾患は、年代が高くなるにつれ上昇傾向にあります。特に、循環器系の疾患は、四十代から五十代にかけて急上昇し、また、新生物については、年代とともに上昇傾向にあります。女性には、四十代をピークに下がる傾向にあり、男女の違いが現われています。

### 3 診療報酬明細書の1件当たりの日数・金額

(1) 1件当たりの日数

表8のとおり、入院では、循環器系の疾患、精神障害、新生物、筋骨格系の疾患、内分泌栄養及び代謝の疾患の順で多く、外来では、筋骨格系及び結合組織の疾患、損傷及び中毒、泌尿生殖器系の疾患、新生物、妊娠・分娩及び産じよくの合併症の順で多くなっています。

(2) 1件当たりの金額

入院では、新生物五十万八千三百三十九円で最も高く、以下内分泌栄養及び代謝の疾患、循環器系の疾患、

筋骨格系及び結合組織の疾患、消化器系の疾患の順になっています。

外来では、入院同様第一位が新生物、以下泌尿生殖器系の疾患、消化器系の疾患、内分泌栄養及び代謝の疾患、先天異常が高額を示しています。

更に、1件当たりの日数を、全国教職員の日数と対比してみますと、入院では、十四・四日と全国平均日数十三・二日より一・二日長く、外来では、二日で全国平均日数二・二日より〇・二日短くなっています。

また、1件当たりの金額についても、入院では、二十五万七千六百四十一円と全国平均額二十三万八千三百五十五円より八・一パーセント高く、徳島県に次いで全国第二位、外来では、九千二百六十六円、全国平均額一万二千四百九十九・七パーセントも低い、順位では全国第十七位です。

このように、本県教職員の医療費の特徴は、入院では、日数が長く医療費が高い反面、外来では、日数が短く医療費が低くなっています。

このことについて、要因を分析する全国的資料がなく、本県の特異性の追求は困難ですが、本県の場合、入院では、新生物、循環器系の疾患等の重篤な疾患並びに筋骨格系の疾患、内分泌栄養及び代謝の疾患等長期療養を要する疾患が多いのではないかと考えられます。

このことについて、要因を分析する全国的資料がなく、本県の特異性の追求は困難ですが、本県の場合、入院では、新生物、循環器系の疾患等の重篤な疾患並びに筋骨格系の疾患、内分泌栄養及び代謝の疾患等長期療養を要する疾患が多いのではないかと考えられます。

### 4 悪性新生物と成人病

疾病分類による受診状況(件数、金額、男女別、年代別)及び診療報酬明細書の1件当たりの日数、金額についての分析調査結果をみてきましたが、更に、死亡率が一番高く、かつ1件当たりの診療金額、日数の多い新生物について手作業により分析を行いました。この結果は、表9のとおりです。

この悪性新生物の受診状況を、本県教職員の悪性新生物による死亡状況と対比してみますと、先ず、受診状況では、男性は多い順に、胃がん、腸がん、肺がんの順になっており、女性は、乳がん、胃がん、子宮がんの順になっております。これに対し死亡状況では、それぞれ受診状況とほぼ同じ傾向にあります。更に、男性の肝がん、白血病が死亡率高位にあります。一方、女性の子宮がんによる死亡率ゼロは、子宮がん検診等の効果によるものではないかと考えられます。

なお、全体で胃がんに続き腸がん、肺がんが高位を示していますが、これは、日本人全体の傾向と同様、胃がんが減少し、代わって腸がん、肺がんが増加する傾向を示しているものと思われる。

次に、新生物と同様、死亡率、受診率ともに高位を占めている成人病関連の疾病についてみますと、表10のとおり受診状況で男性は、高い順に高血圧性疾患、消化性潰瘍、胃及び十二指腸疾患、女性には、高血圧性疾患、胃及び